

オランダ通詞の太宰府旅行

江戸時代に太宰府天満宮参詣への旅は大いに流行し、これまで何回か紹介してきたようにさまざまな人々が太宰府を訪れていました。今回は、江戸時代の通詞であったオランダ通詞中山某の太宰府旅行を紹介したいと思います。

天保3年（1832年）3月、中山は太宰府天満宮を参詣しました。おそらくこの中山某は、当時、オランダ大通詞を務めていた中山作三郎という人物であったと考えられます。中山は「太宰府参詣道記」（シーボルト記念館所蔵）という、旅の金銭出納簿を付けています。この帳簿には金銭出納しか記されていませんが、当時の物価や中山がどのような旅をしていたのかが伺える貴重な史料です。言うなれば「武士の家計簿」ならぬ「通詞の旅費出納簿」というものでしょう。

中山は3月18日に長崎を出発し、諫早、嬉野、武雄などを經由して唐津街道へ入り、唐津から前原、今宿、姪浜などを通過して、23日に福岡・博多へ到着します。翌日、博多を出発し、宰府で二泊して太宰府天満宮へ参詣しました。帰路は26日に宰府を立ち、武蔵、久留米、上ノ町、柳川、若津を廻って寺井から長崎街道に入り、佐賀、牛津、小田、北方を通り、武雄から同じコースで4月8日に長崎に帰りました。

中山は博多や宰府でどのように過ごしたのでしょうか。博多では金1分（二両の4分の1、およそ4、5万円）

太宰府人物志

資料室だより④

を銭1貫720文（1貫は1000文、1文はおよそ10〜30円）に両替して、所持金はこれまでの残金とあわせて1貫828文となりました。そこから宿代1貫、人足賃270文、雪駄代120文などを支払っています。どうやら彼は一人旅をしているようで、荷物持のためか毎日3〜4人の人足を雇っていました。このほかに、うどん代27文、飴代24文、饅頭代30文なども支払っており、博多での支払い合計で一貫720文でした。

翌日、宰府へ到着した中山は、所持金も少なくなっていたため、金2朱（1両の8分の1）を銭840文に両替しました。太宰府では初日に梅ヶ枝餅を70文で購入しています。また、参詣のために髪結いをして64文を支払い、お賽銭に38文を奉納しています。翌日、よほど梅ヶ枝餅が気に入ったのか、今度は100文で購入しています。また、両日とも宿代を支払っていないことから、中山は宿坊に泊まっていたようです。太宰府出発の日には、金2朱の両替を行い、人足や籠などを雇って久留米へと向かいました。中山の19日間にもわたる太宰府旅行の費用は、銭35貫650文、金に換算して5両2分（およそ110万円）で、中山はゆっくりと時間をかけた、とても優雅な旅を楽しんだようです。

市史資料室 矢野健太郎